

環境思想・教育研究会

大会テーマ

科学技術万能主義からの脱却

環境思想フォーラム

科学技術をめぐる現代の課題

シンポジウム

原発安全神話と科学技術の問い直し

— 原発避難の現実から考える

11月27日（日）

於東京農工大学

10：00-12：00 個人研究報告

13：00-15：00 座談会

大会参加費 1000 円（学生無料）

懇親会費 2000 円

環境思想・教育研究会事務局

web: <http://environmentalthought.org>

mail: contact@environmentalthought.org

11月26日（土）

於東京経済大学

10：10-12：40 環境思想フォーラム

13：30-14：00 会員総会

14：00-17：30 シンポジウム

18：00-20：00 懇親会

個人研究報告

座談会

これまでの研究会誌と大会を振り返る
— 研究会の発展に向けて

第3回 研究大会

第3回 環境思想・教育研究会 東京大会について

第1回弘前大会、第2回大阪大会と続き、第3回大会は初めて東京での開催となります。

今回の会場となる（東京都はいえ東京23区と異なる）多摩地域は、30市町村に420万人の住民が住むベッドタウンではありますが、まだまだ市内には畑や田圃も残る田園都市の風景を形づくっています。そのような落ち着いた環境で、今回の大会は開催されます。

今回の大会テーマは、「科学技術万能主義からの脱却」です。現代の生活、情報そして生命にいたるまで科学技術に依存し、あるいは操作されうる時代のなかで、さまざまな困難な課題が発生しています。大会のフォーラム、シンポジウムではこの点を大いに議論して参ります。

環境思想・教育研究会は設立10周年を経て、時代の動向からしてもいよいよその学問的必要性が高まっています。今後独自の学問分野確立のための組織的な発展も求められています。そこで今回の大会に合わせて、より多くの学生などに環境思想にふれてもらい、環境思想に関心を持つ人々の層を拡大するために、初学者向けのブックレット本を出版することになりました。大会時には新刊初々しいブックレットを皆様にご紹介できる予定です（岩波書店より11月刊行）。

最後になりましたが、今回は会場の入試の関係で1日目と2日目の開催場所が異なることになり、会員の皆様にご迷惑をお掛けしますこととお詫び申し上げます。

多くの会員の皆様と大会でお会いできることを楽しみにしております。

2016年10月

第3回東京大会実行委員長

尾崎 寛直（東京経済大学）

◎遠方からのご出席皆様へ

会場へのアクセスとなる国分寺駅、府中駅いずれにもビジネスホテルがございます。主なところを以下ご紹介いたします。（実行委員会できくに部屋の確保はいたしておりませんので、お手数ですが各自の手配をお願いいたします。）

【国分寺駅近辺】

- ・ホテルメッツ（南口徒歩1分）
シングル朝食付き 8900円～ tel. 042-328-6111
- ・ホテルダイワ（DAIWA）（南口徒歩1分）
シングル素泊まり 7500円～ tel. 042-324-5221

【府中駅近辺】

- ・府中アーバンホテル別館（駅西側出口徒歩1分）
シングル素泊まり 9070円～ tel. 042-367-7777
- ・ビジネスホテル シティテル府中（駅東側出口徒歩1分）
シングル素泊まり 9050円～ tel. 042-334-9111
- ・ホテル中央館（駅西側出口徒歩2分）
シングル素泊まり 8050円～ tel. 042-361-4065

※昨今、国分寺・府中に限らず、外国人旅行客の増加などの影響で東京のホテルは軒並み予約が取りづらく価格も高騰しておりますので、ご注意ください。

第 3 回 環境思想・教育研究会 東京大会プログラム

大会テーマ： 「科学技術万能主義からの脱却」

開催場所： 1日目：東京経済大学（国分寺市）、2日目：東京農工大学（府中市）

※1日目、2日目と開催場所が異なりますのでご注意ください。

第 1 日目	2016 年 11 月 26 日（土） 2 号館 1F、大倉喜八郎進一層館	
タイムテーブル	内容	会場
9：30～	開場・受付開始	2 号館 1F エントランス
10：00～10：10	開会セレモニー	2 号館 B101 教室
10：10～12：40	環境思想フォーラム 「科学技術をめぐる現代の課題」	2 号館 B101 教室
12：40～13：30	昼食・休憩	
13：30～14：00	会員総会	2 号館 B101 教室
（会員総会終了後、会場移動）	シンポジウム 「原発安全神話と科学技術の問い直し ～原発避難の現実から考える～」	大倉喜八郎 進一層館ホール
14：30～17：40	・基調講演 ・特別発言 ・パネルディスカッション	
18：00～20：00	懇親会	進一層館ラウンジ

第 2 日目	2016 年 11 月 27 日（日） 第一講義棟 16～18 番教室	
タイムテーブル	内容	会場
9：30～	開場・受付開始	1F エントランス
10：00～12：00	個人研究発表 A 会場、B 会場	A：17 番教室 B：18 番教室
12：00～13：00	昼食休憩	
13：00～14：30	座談会 「これまでの研究会誌・大会を振り返る～研究会の発展に向けて」	16 番教室
14：30～	閉会の辞	

◎大会参加費：1000 円（学生・大学院生は無料）、懇親会費：2000 円

第1日目 (11/26)

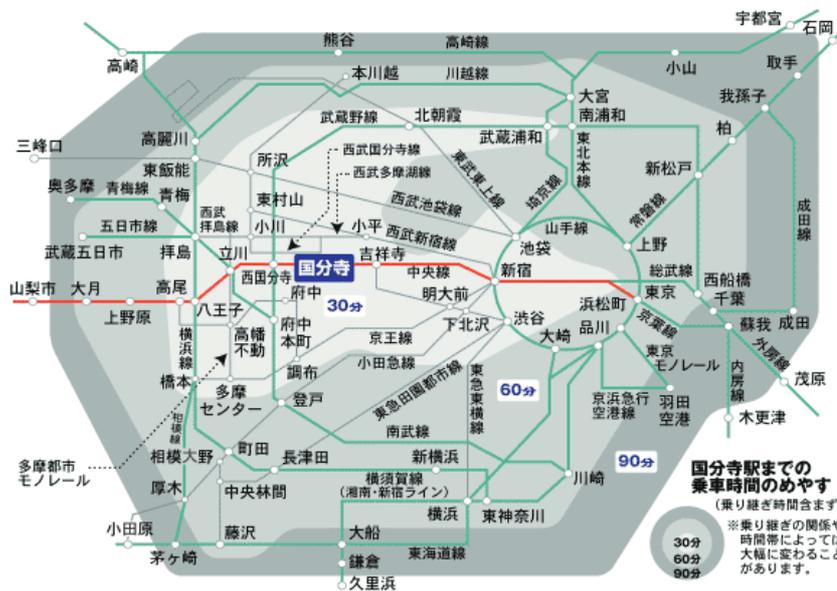
東京経済大学
 (JR 国分寺駅下車
 南口より徒歩 12 分)



○国分寺駅からのアクセス



○各鉄道からのアクセス



※JR 中央線「新宿駅」から「特別快速」電車で、「国分寺駅」まで約 21 分、「快速」電車で 31 分です。

第2日目 (11/27)

東京農工大学 府中キャンパス

(JR 国分寺駅南口から
府中駅行きバス7分

「晴見町」下車徒歩1分

または

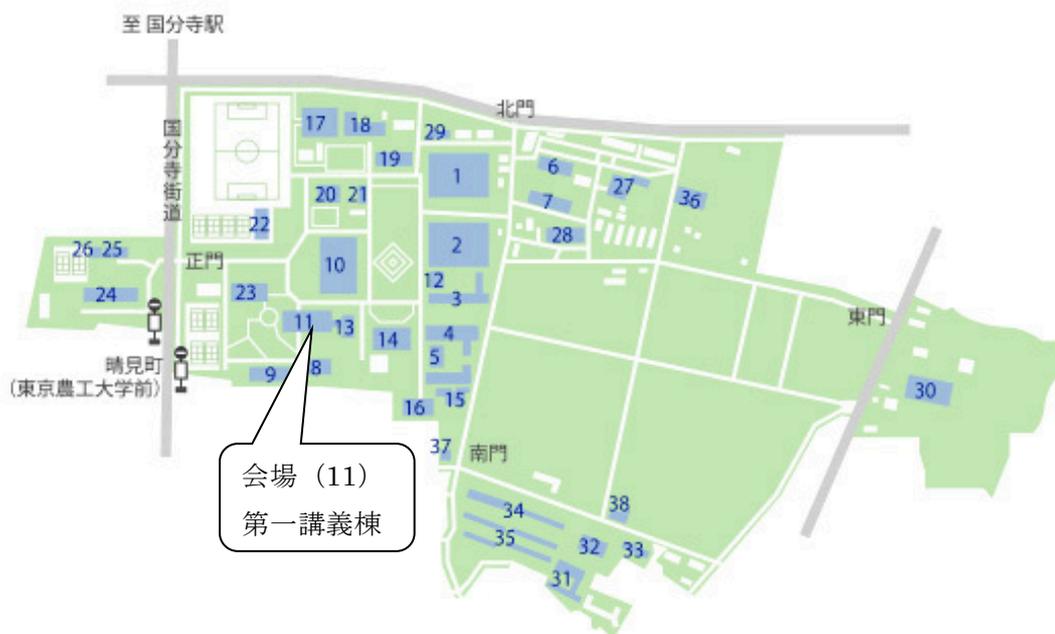
京王線府中駅から国分寺駅
南口行きバス6分

「晴見町」下車徒歩1分)

○府中駅または国分寺駅か
らのアクセス



○府中キャンパス案内図



第1日 11月26日(土) プログラム

9:30～ 開場・受付 【2号館 1F エントランス】

10:00～10:10 開会セレモニー 【B101 教室】

1. 開会の辞 環境思想・教育研究会 会長 尾関 周二
2. 開催校より 大会実行委員長 尾崎 寛直

10:10～12:40 環境思想フォーラム 【B101 教室】

「科学技術をめぐる現代の課題」

1. 「生産活動における科学・技術の包摂と相対的分化」佐野正博（明治大学）
2. 「これからの環境教育の在り方を問う—科学技術は「環境」をどのように変えていくのか」
吉田健彦（東京家政大学）
3. 「〈農〉と科学技術—緑の革命と遺伝子組み換え作物から考える」
大倉 茂（立教大学）

司会進行：増田敬祐（茨城大学）、布施 元（東京家政大学）

13:30～14:00 会員総会 【B101 教室】

14:30～17:40 公開シンポジウム 【大倉喜八郎進一層館ホール】

「原発安全神話と科学技術の問い直し～原発避難の現実から考える」

■基調報告（14:40～15:30）

「チェルノブイリ原発事故と『避難者の権利』」

尾松 亮（関西学院大学災害復興制度研究所）

——休憩（15:30～15:45）——

■特別発言（15:45～16:00）

「福島第一原発事故・母子避難の苦悩」 吉田 千亜（ジャーナリスト）

■パネルディスカッション（16:00～17:40）

パネラー発言

(1) 「避難者の原発事故・汚染認識と避難の決断」

早尾 貴紀（東京経済大学）

(2) 「被ばく健康リスクをめぐるディスコミュニケーションと住民運動」

山川 幸生（東京災害支援ネット）

(3) 「なぜ『変わらない』ようにみえるのか？——原子力関連施設立地地域の調査からみえてきたこと」

澤 佳成（東京農工大学）

司会：関 陽子（長崎大学）、コーディネーター：尾崎 寛直（東京経済大学）

18:00～20:00 懇親会 【進一層館ラウンジ】

第2日 11月27日(日) プログラム

10:00~12:00 個人研究発表 【第一講義棟 A会場 17番、B会場 18番教室】

A会場 (司会: 穴見慎一 (立教大学))

- (1) 「〈未来可能性〉概念の思想的前史の整理および概念分析」
太田 和彦 (総合地球環境学研究所)
- (2) 「ネスのエコソフィをスピノザから読み解く」
浦田 (東方) 沙由理 (立教女学院短期大学)

B会場 (司会: 澤佳成 (東京農工大学))

- (1) 「デジタルメディアは生命の畏怖を伝え得るのか—情報化時代におけるアケイロポイエトスの可能性について」
吉田 健彦 (東京家政大学)
- (2) 「石牟礼道子における近代批判の思想—水俣病三部作の読解を中心として」
間庭 大祐 (立命館大学)

13:00~15:00 座談会 【16番教室】

「これまでの研究会誌・大会を振り返る～研究会の発展に向けて」

コーディネーター: 布施元 (東京家政大学)

15:00~ 閉会セレモニー 【16番教室】

大会事務局からお知らせ

(1) 1日目の懇親会について

懇親会ご参加の方は、分科会終了時まで、大会受付にて参加チケットをお求め下さい。参加費は2000円です。参加費は安くしておりますが、会員の皆様にきつとご満足いただけるよう選りすぐりの料理と美酒を用意しておりますのでふるってご参加ください。

(2) 1日目の昼食について

初日は周辺に食事処がないため(徒歩5分の場所にコンビニはあり)、仕出し屋の特製弁当を販売いたします。お茶付きで800円です。購入ご希望の方は環境思想フォーラム開始前まで(10時まで。それ以降は時間的に不可)に事前お申し込みの上、12時30分以降お弁当券と引き換えに、受付にてお受け取り下さい。

大会前日までに、事務局まで事前にメールでご依頼いただくことも可能です。

企画紹介

<p>趣 旨</p>	<p>本フォーラムは、現代社会における科学技術のあり方、そしてこれからの科学技術のあり方を環境思想という視角から問うことを目的とする。</p> <p>科学技術「信仰」が現代社会にはびこるなかで科学技術を環境思想から捉え直し、人間と科学技術の関係を思想的課題として取り上げる。そこで過去の環境思想・教育研究会の議論を踏まえながら報告者それぞれの視点を会員の皆様と共有し、今後の議論へとつなげたい。</p>
<p>タイムテーブル</p>	<p>10：10～11：30 パネラー報告 11：30～12：40 ディスカッション</p>
<p>概 要</p>	<p>(パネラー報告)</p> <p>1. 「生産活動における科学・技術の包摂と相対的分化」 佐野正博（明治大学）</p> <p>「ラジウムの放射性崩壊による巨大な原子エネルギーの放出」という物理的現象のキューリー夫妻による 1898 年の発見（福島第一原発事故では、ウランの核分裂反応停止後もなお残る放射性崩壊熱の巨大さが事故の物理学的原因となった）、「$E=mc^2$ という質量のエネルギーへの転化に関わる理論的定式」のアインシュタインによる 1905 年の発見、天然ウラン濃縮技術の発明などによる原爆の製造、米国による原爆の投下、20 世紀後半における原子力発電所の社会的普及は、互いに連関はしているが、相対的に区別すべきことである。「キューリー夫妻やアインシュタインの発見が原爆や原子力発電所を導いた」というのは複雑な社会的現象をあまりにも単純化して捉え、社会的責任の曖昧化を図るものである。</p> <p>本報告では、「環境にやさしい自動車」などの具体的事例をもとに、「科学的活動」、「技術」的活動、「生産」活動という社会的活動の区別と連関という視点からそうした問題を論じる。</p> <p>2. 「これからの環境教育の在り方を問う—科学技術は「環境」をどのように変えていくのか」 吉田健彦（東京家政大学）</p> <p>極度に発達した科学技術により生態系や人間自身が傷つけられていることに対して危機感を抱かない者は居ないだろう。本研究会はその名に掲げているように「環境教育」を一つの柱としてこれまで様々な論者により研究を蓄積してきたが、環境教育もまた、この危機への応答を試みる一つの重要な</p>

視座である。

しかし現代社会において、そもそも「環境」という言葉が指し示すもの自体が、根本的にその様態を変えてきているのではないだろうか？ 近年注目されているIoTは、科学技術が「環境」と融合し我々の生活空間を変容させていることを端的に示している。また子どもの生育環境を考えればスマートフォンやインターネットなどの情報メディアはまさに彼ら／彼女らが生きている場を構成する根本的要素である。これらのことから見えてくるのは、このような新たな「環境」のなかで生きていくための「環境教育」こそが、いま求められているのではないかということである。本報告は、環境教育と（報告者の専門である）情報教育との統合について、その展望を検討する。

3. 「〈農〉と科学技術—緑の革命と遺伝子組み換え作物から考える」

大倉 茂（立教大学）

本報告は、〈農〉と科学技術の関係を取り上げる。近代化のながれのなかで、農業が工業的な農業として進展している。工業的な農業とは、まさに〈農〉の科学技術化といってもよいだろう。そこで、バイオテクノロジーを背景とした遺伝子組み換え作物とグローバル市場経済の問題を取り上げ、〈農〉に科学技術が入り込む構図、そしてそれを強力に推し進めるグローバル市場経済のありようを見ていく。そして、まさに工業的な農業のひとつの象徴としてある「緑の革命」の批判に取り組んだヴァンダナ・シヴァの思想を見ていく中で、科学技術と市場経済の関係だけでなく、科学（あるいは近代科学）そのものに内在する技術との親和性に注目し、バイオテクノロジーとグローバル市場経済の関係について思想的に探求する。

<公開シンポジウム>

【大倉喜八郎進一層館ホール】

「原発安全神話と科学技術の問い直し～原発避難の現実から考える」

司会：関 陽子（長崎大学）

企画紹介

趣 旨	<p>震災5年を経た福島では、もはや「復興」という名の下に、被災した住民が放射能による健康影響の不安を語ることも、健康な環境での居住のための「避難」という選択を行うこともタブー視され、県外に避難した避難者の命綱である住宅補助も今年度末をもって打ち切れようとしている。避難者がいなくなるわけではなく、避難という行為そのものを保障することが公式の政策メニューから消されようとしている。</p> <p>「福島県県民健康調査」では通常では考えられないレベルの子どもの甲状腺がんの多発が確認されているものの、情報公開も不十分な「科学的」知見に基づく構造的圧力によって、もうすでに健康被害は将来的にも「ありえない」ことにされつつある。</p> <p>科学技術の「安全神話」によってもたらされた原発事故によって強いられた避難を経験した被災者たちは、今度は「復興」「帰還」の圧力によって追い詰められている。</p> <p>そこで、私たちは世界で初めて原発事故による「避難者の権利」を保障したチェルノブイリ法から多くを学ぶ必要がある。日本版チェルノブイリ法制定をめざした「原発事故子ども・被災者支援法」は、「科学的」知見を牛耳る為政者らによって放置され、骨抜きにされてきた。日本とチェルノブイリ被災諸国において、なぜこれほど放射線被ばくへの対処が異なるのか。</p> <p>こうした現実を前に、市民は原子力という巨大科学技術とどう向き合えばいいのか、原子力をめぐる政策はどうあるべきか、第一線で研究や活動을続ける識者を交えて思考したい。</p>
タイムテーブル	<p>14：30 開催挨拶・趣旨説明</p> <p>14：40～15：30 基調講演</p> <p>休憩（15：30～15：45）</p> <p>15：45～16：00 特別発言</p> <p>16：00～17：00 パネラーからの報告</p> <p>17：00～17：40 総合ディスカッション</p>

概 要	<p>■基調報告</p> <p>「チェルノブイリ原発事故と『避難者の権利』」 尾松 亮（関西学院大学災害復興制度研究所）</p> <p>チェルノブイリ原発事故（1986年）の5年後、91年に成立した「チェルノブイリ被災者保護法」（チェルノブイリ法）では、一定の汚染度を超える地域の住民に「移住の権利」と同時に「住み続けるリスクに対する補償」を認めた。</p> <p>これは短期的な原状回復が不可能であることの認識に立ち、「甲状腺がん」などの目に見える実害がなくとも、「居住地域が法定基準を超えて汚染された」リスクに対する補償を認めるものだ。</p> <p>近年この法律の執行率が下がったことや、補償金額が縮小されたことばかり報じられる。しかし、この法律が、地域住民の「避難」「放射線防護」についての選択を社会的に承認した効果は大きい。このような社会的関係を可能にした、チェルノブイリ法の思想に注目する。</p> <p>■特別発言</p> <p>「福島第一原発事故・母子避難の苦悩」 吉田 千亜（ジャーナリスト）</p> <p>原発事故が発生し、今なお、福島県だけで、86863人（9月12日時点）の方が避難生活を送っている。避難指示のなかった区域、いわゆる自主避難者の人数は未だに正確に把握されていない。把握されていないどころか、今後は、2017年3月に迫る借上住宅打ち切りを機に、どんどん登録から抹消されていくことになる。避難指示のなかった地域の、数えられなかった被害、消されてゆく被害について、改めて考える時期に来ている。「母子避難」「自主避難」そして、福島県中通りを中心にした、現地の取材をもとに考える。</p> <p>■パネルディスカッション（パネラー発言）</p> <p>(1)「避難者の原発事故・汚染認識と避難の決断」 早尾 貴紀（東京経済大学）</p> <p>原子力発電所の深刻な放射能汚染をとまなう事故の際に、避難さらには移住という方法で被曝リスクを避けようと行動した一般市民は、原子炉の構造や、放射性物質の特徴、被曝のメカニズムなどについて、あらかじめ知識を持っている者は極めて限られていた。また事故後にある程度学習が進んだとはいえ、情報開示は不十分で、さらに専門家のあいだでさえ、事故や汚染の程度、健康への影響について一致した見解がない状況であった。</p> <p>そうしたなかで、被災地の市民らの避難や移住の決断はどのようになされ、また実際の避難や移住はどのようなルートや行き先だったのか。原発に關す</p>
-----	---

る理論や技術の「素人」たる市民の判断と行動を整理する。

(2) 「被ばくの健康リスクをめぐるディスコミュニケーションと住民運動」

山川 幸生（東京災害支援ネット）

福島第1原発事故では、東北・関東を中心とする広範な地域が放射性物質で汚染された。放射線による被ばくの影響を懸念する住民は多い。しかし、福島県内で事故当時18歳以下だった者を対象とする甲状腺検査が行われているほかは、政府は同事故に関連する医療健康対策には消極的である。

その甲状腺検査の結果、これまでに、がんまたはがんの疑いと診断されたのは174人（2016年9月14日の県民健康調査検討委員会）。これに対し、環境省の専門家会議は、同事故による被ばくの生物学的影響を認めず、今後の疾病リスクの可能性も小さいとした。低線量被ばくは心配ないという政府側のPR（リスコミ）に覆われるなか、検査対象地域の拡大など医療健康対策の充実を求める住民運動にも注目したい。

(3) 「なぜ『変わらない』ようにみえるのか？——原子力関連施設立地地域の調査からみえてきたこと」

澤 佳成（東京農工大学）

3・11が起き、避難を巡って被災者が苦悩する姿を目の当たりにしているはずなのに、なぜ、原子力関連施設立地地域では、自治体が再稼働の要請を行ったりするのだろうか。よくいわれるように、原発マネーがなければ自治体行政が成り立たなくなっているからだという理由は、その通りだと思われる。

しかし、だからといって、「推進」する人びとを「結局はいのちよりカネが大事なのか」と感情的に批難したところで、事態はけっして改善しない。では、どうすればよいのだろうか。

本報告では、青森県下北地域での4年半の調査をもとに、原子力政策に「賛成」する人びとの中には、積極的に「推進」する人びとだけでなく、なかば「容認」しているだけの人びともいるのではないかと、という仮説を提起する。また、「容認」する人びとと「反対」する人びととの間に共通する思いもあるのではないかと指摘したうえで、私たちに出来ることはあるのか、考えてみたい。

コーディネーター：尾崎 寛直（東京経済大学）

企画紹介

<p>タイムテーブル</p>	<p>A会場、B会場共通 10:00~12:00</p>
<p>概要 (A会場)</p>	<p>(1) 「〈未来可能性〉概念の思想的前史の整理および概念分析」 太田 和彦 (総合地球環境学研究所)</p> <p>2015年9月、国連は2030アジェンダとして、17のゴール、169のターゲットからなる行動指針「持続可能な開発目標」を採択した。持続可能性(sustainability)は、提起から29年を迎えた今日でも未来の社会のあり方の構想する規矩となりえている。しかし、「未来の事柄の内容の可能性」の考察が盛んである一方、「未来(未だ来ない)ということそのもの」の考察は相対的に不足している。後者によって初めて、過去の出来事からの類推は「未来の事柄の内容」として成立するにもかかわらずである。</p> <p>この側面の考察に有効なのが、「未来可能性」(Futurability: Handoh and Hidaka 2010 他)である。本報告は「未来可能性」概念の検討を通じて、同概念が使用者にどのような新しい選択肢を選択可能とし、行為のための新しい機会を使用者にもたらすかを記述的に解明する。具体的には、①同概念を思想史、特に環境倫理学史上に位置づけ、②同概念が使用者の行為の理解の仕方をどのように変えうるかを考察する。</p> <p>(2) 「ネスのエコソフィをスピノザから読み解く」 浦田 (東方) 沙由理 (立教女学院短期大学)</p> <p>ディープエコロジーの提唱者であるアルネ・ネスは20世紀以降深刻化する環境危機に際し、資本主義社会がうみだす消費型人間を自然や生命への配慮をともなった創造型人間へと変革する必要性を説いた。それはライフスタイルの変換だけでなく自己の生き方・存在の仕方の変換をうながすものであった。そのために必要だったのが自然世界の中に自己を関係づけるという自己関係の哲学(エコフィロソフィ)と自己実現をうながす哲学(エコソフィ)であった。このエコソフィを体系づけることがネスの環境哲学の試みであったといえよう。</p> <p>問題はこの自己実現にいたる際にネスが一体化という概念を使っているという点である。自然との一体化という言葉は読み手に神秘主義的雰囲気を与える。しかしここにスピノザの哲学がふまえられている。本発表ではスピノザの哲学をふまえることで、誤解されがちなネスのエコソフィの真髄を明らかにしたい。</p> <p style="text-align: right;">司会：穴見慎一 (立教大学)</p>

概 要
(B 会場)

(1)「デジタルメディアは生命の畏怖を伝え得るのか—情報化時代におけるアケイロポイエトスの可能性について」

吉田 健彦 (東京家政大学)

環境思想においてしばしばみられるローカルへの称揚は、それ自体は間違っていないとしても、先進諸国に住む我々がこれまでに犯し、また現在においても犯し続けている途上国や自然への支配と搾取に対する責任＝倫理を果たすための根拠となるとは言い難い。したがって我々は、現実問題としてグローバル化してしまっているこの現代社会において、様々な被抑圧者に対する責任＝倫理を果たすためにデジタルメディアが果たし得る役割について考察する必要がある。デジタルメディアはグローバルな支配と搾取の構造を可能にするための技術的必須要素であるが、同時に、もし我々が(空間的／文化的その他の要因により)決して直接対面することのない被抑圧者たちとの交わりをなお求めるのであれば、それはデジタルメディアによるより他はないためである。だが、それが持つ複製可能性故に、他者性、生命性を仮想化するとされるデジタルメディアにより映し出される何者かに対して、我々は真の意味で責任＝倫理を感じ取ることができるのだろうか。本発表ではキリスト教聖遺物におけるアケイロポイエトスの概念、またバルトの写真論などを参照しつつ、グローバルな責任関係においてデジタルメディアが果たし得る可能性について考察していく。

(2)「石牟礼道子における近代批判の思想—水俣病三部作の読解を中心として」

間庭 大祐 (立命館大学)

本報告では、石牟礼道子の水俣病三部作(「苦海浄土」「神々の村」「天の魚」)を詳細に検討することによって、石牟礼における近代批判の思想の内実に迫りたい。一般的に石牟礼道子は水俣病の惨状を告発した作家と看做されているが、しかし、それ以上に石牟礼は水俣病に近代文明の極相を看取しているということに着目せねばならない。近代批判こそ石牟礼思想の中核なのである。

とはいえ、石牟礼の近代批判は一見ロマン主義的観点から為されるものであるかのように思える。というのも彼女自身「水俣」を反近代主義的ロマン主義的原郷であるかのように描き出すからである。しかし、実は石牟礼のテクストは近代への本能的嫌悪と原郷への憧憬の断念という間で揺れ動いている。本報告では、こうした石牟礼の近代批判の困難さに焦点をあて、反近代もしくは前近代への回帰でもなく、近代のプロジェクトのさらなる展開でもない道を石牟礼が思索していることを明らかにする。

司会：澤佳成 (東京農工大学)

<座談会>【第一講義棟 16 番教室】

「これまでの研究会誌・大会を振り返る～研究会の発展に向けて」

司会：布施元（東京家政大学）

企画紹介

趣 旨	2005年に設立された本研究会はこれまで、3回の研究大会を開催するとともに9冊の研究会誌を刊行してきました。そこで、これまで研究会誌で取り上げてきた主な内容や、そこにも報告論文として掲載された研究大会を振り返りながら、環境思想と環境教育について広く意見交換をする場を設けることにしました。研究会誌や研究大会で扱ってきたテーマを概観し再確認することを通して、新たなテーマや継続して深めていくべきテーマなどについて語り合いながら、これからの本研究会を考える機会にもなればと思います。
タイムテーブル	13：00～13：15 趣旨説明・これまでの振り返り 13：15～15：00 ディスカッション